

成瀬巳喜男（1905-1969）については、これまでも述べた経緯はあるものの、今回二本の作品を見てまた改めて成瀬巳喜男の本質を見極めることのできる機会を得たものだという思いを強くしました。1937年頃から1951年頃まで続いた永いスランプ期間と言われますが、この期間の成瀬作品でそうしたことを感じさせないものもあるのです。『旅役者』（1940年）と『なつかしの顔』（1941年）がまさにそれです。どき回りの一座の中でもハリボテの馬の前脚と後脚を演じる二人の役者（役者と言えるかどうか別にして、前脚担当を演じる中村兵六はこの前脚を演じることに矜持を強く感じています）を主人公としたこの作品は、伝統芸能の高尚な世界や天才の苦悩を描いたシリアスな成瀬巳喜男の「芸道もの」からすれば実に対照的な作品です。「芸道もの」の外伝的な作品とも言えるでしょうし、自ら「芸道もの」のパロディを作ったとも言えます。肩肘張らず心地よいテンポで進んでいくこの作品は実にチャーミングです。成瀬巳喜男の視点なり視線は常に市井の人々、それもその中でも弱者に向けられますが、本作もその特徴が表現されます。後年の作品で頻繁にチンドン屋を登場させる成瀬巳喜男ですが、通底するこだわりは地続きの同じ視線からだったのではないのでしょうか。本作での珍騒動はなによりも典型的なドタバタ調の一形態と言えます。主演は藤原鶏太（藤原鎌足の戦時中この名義、不敬罪に当たるとして変えられました）、柳谷寛、高勢實乗と地味目ですが実力派が揃いその演技力が光ります。

そして、『旅役者』のほぼ一月後に公開されたのが『なつかしの顔』（1941年）です。成瀬巳喜男が原作・脚本・監督を務めた34分の小品です。このストーリーはチャン・イーモウ（張芸謀）の『ワン・セコンド』（2020年）のストーリーに極めて類似しています。張芸謀の作品は、文化大革命の時代にニュース映画フィルムの中に1秒だけ映っている娘の姿を見るために労働改造所を脱走した父親の話がプロットの一つですが、成瀬巳喜男の作品は出征し戦地での姿がニュース映画に出ていることを知る妻や母親たちが、遠くの街まで観に行くことをメインにした物語です。共通するのは、貧困・戦時下（文化大革命は平時との状況と大きく異なることから戦時下とも看做せず）・ニュース映画ということになりますか。TVのない時代、映画館で見る本編映写の前に映し出されるニュース映画は一般の人々にとっては唯一のニュース映像でした。TV普及後も映画館でニュース映画を見ていた記憶があり、いつまでそうした習慣が続いたかは定かではありませんが。

張芸謀が成瀬巳喜男について述べたものを見た記憶はなく、また本作を見たという可能性は極めて低いと思われます。単なる偶然でしょうが、そう言い切れないかもしれません。夫または子供を戦争に取られ銃後（現在では死語でしょうが、戦場の後方の意。直接戦闘に関わらない一般国民を指しました）を守る家庭は働き手を失い多くは貧乏でした。本作に出てくる家庭も夫の留守を守る妻、姑、小学生の弟という家族構成で、自給自足の農業に頼る生活です。おそらく現金収入は微々たるものでしょう、80銭（現在価値で500円あたり）のグライダーを買うのにも一苦勞です。こうした銃後の貧困な生活が描き出されます。しかし、時代はそれ以上に戦意の昂揚を掲げます。ニュース映画に映る夫の姿を妻はしかと確かめることができたのでしょうか。成瀬巳喜男的リアリズム映画として、反戦思想を感じさせないとは言えない作品です。ここでも成瀬巳喜男の視線は最も立場の弱い人たちに注がれます。成瀬巳喜男という人

は、小品・短編においてすら、自らの作家性を100%純度の高い形で結晶化できた人物であることを証明したと言えるのではないのでしょうか。また、主演の赤木蘭子（1914-1973）の健気さが目立ちます。余談ですが、この赤木蘭子の姪に当たるのが小説家でシナリオオラターでもある筒井ともみ（1948- ）です。

新しい作品から一本挙げるとステファン・ドゥームスティエ監督『新凱旋門物語』（2025年）です。ルーヴル美術館からコンコルド広場、シャンゼリゼ通りを経て凱旋門まで一直線に伸びるパリの歴史軸。この延長線上にある西郊のデファンス地区に新凱旋門があります。当時ミッテラン大統領が建造計画を推進した国家の大事業であり、フランス革命200年の1989年に完成しました。1983年の国際コンペでデンマークの建築家ヨハン・オットー・フォン・スプレッケルセン（1929-1987）の作品が選ばれますが、まったくの無名建築家でこれまでの実績といえは自宅と四つの教会だけだといえます。建築を進めるに当たって、官僚のシェビロン、シャルル・ドゴール空港を手掛けたポール・アンドリュウ（後にパリ空港公園の副総裁を務めた官僚の側面を持つ建築家）、もちろんミッテランも登場しますが、この手のプロジェクトには常に衝突が起り、推進者には孤独感に苛まれる苦悩の姿が浮かび上がります。最大の危機はミッテランの社会党が選挙で大敗を喫し保革共存の政治体制となり、予算の大幅な削減で計画自体が大きく改変されるところです。古賀重樹の言葉を借りれば「第5共和政の元首の権威とその失墜。無名の建築家の栄光と挫折。都市計画と民主主義の歴史が息づく国だからこそ描きえた物語」ということになります。ドゥームスティエのスタンスはあまり踏み込みすぎず、客観的な視点を保ちます。しかし、そこからはヨハン・オットー・フォン・スプレッケルセンのストレス耐性と心身を蝕まれていく悲劇をリアルに感じ取ることができます。日本の新国立競技場建設をめぐる騒動を振り返れば、これも多分に政治臭のするものであり、開催時期の延期も相まって混迷を極めました。新凱旋門についてはそれを上回る人間同士の葛藤劇が繰り広げられ不幸な結末を迎えることになります。そこには栄光と挫折が明瞭に見てとることができます。栄光と挫折という表現より、その真相は幸運とそれが原因となった憤死ともいべき悲劇です。ここも余談ですが、なぜか本作を見た後、偶々渡邊英理の「現代中国を舞台に（再）開発の輻輳的な力関係を描く」という表題の仁科敏「丹心」の書評に出会い都市の再開発に関連する一冊の存在を知り、また90年代生まれの九段理江という若手作家の「東京都同情塔」に深い感銘を覚えたことは筆者にとつての僥倖でした。思いがけず有機的な繋がりが生まれることがあるものです。（文中敬称略）